



MINATO-TOKYO

みなとユネスコ 会報

Bulletin

MINATO UNESCO ASSOCIATION NEWS & CALENDAR

ISSUED BY / MINATO UNESCO ASSN. 16-3, SHIMBASHI 3-CHOME MINATO-KU TOKYO 105-0004 / HIROSHI NAGANO PRES.
発行所 / 港ユネスコ協会 〒105-0004 東京都港区新橋3-16-3 Tel: 03-3434-2300 Fax: 03-3434-2233 発行人 / 永野博
Mail: info@minatounesco.jp http://minato-unesco.jp

2019年3月1日発行 第155号

P1	巻頭言：特攻兵士の死と川端康成	P10-11	運河巡り
P2-4	音とホール音響	P12-13	海外を笑わせた落語
P5	コロンビアの家庭料理	P14	茶の湯体験教室
P6-8	第二回日本語スピーチコンテスト	P15	MUA 新年会
P9	書道体験教室	P16	事務局便り/編集後記

特攻兵士の死とノーベル賞作家川端康成

港ユネスコ協会 名誉会長 三輪公忠



以前に私のアメリカ留学時代の経験として倫理学特殊問題の教室で、イエズス会神父の裁断について書いた記憶がある。それが本紙の為であったかは定かではないのだが。それは太平洋戦争末期に起こったいわゆる「特攻」作戦についてであった。神父で教授の先生が「特攻作戦で死んだ日本軍の兵士の死は自殺であったか、それとも通常の戦場の死と同等であったか」との設問をまだハイティーンに過ぎない若者も交じっている教室で発したのである。そこはワシントン在のジョージタウン大学であった。

学生はほとんどがアイルランド系のカトリック信徒である。男子校であり、みんなそれぞれの信念のもとでマッチョを建前としていた時代の事である。「自殺」はキリスト教では「大罪」であり、死後の行き先は懲罰の地獄であるとされていた。神父による葬儀はご法度で、かような死に方を選んだ者の亡骸は村はずれの細道の十字路の真ん中に埋められ、通行人の土足で蹴散らされるようにされていた。

特攻は私にとっては「英雄死」であって、当時のアメリカの男性文化のなかでは、やはり「勇気ある者」の「名誉ある死」でなければならなかった。それを裏書きするように、突っ込んだ米空母の甲板上に投げ出された日本軍人をアメリカ人艦長が、アメリカ軍人の名誉ある死と同等にあつかって、「国旗」-おそらく特攻兵士がたすき掛けにしていた日章旗-に包んで荣誉ある水葬にしたというエピソードが伝わっている。

そこに働いていた倫理は、私がジョージタウン大学で習ったと同じ論理であった。「特攻死は自殺ではない。なんとならば、特攻兵士の目的は敵艦を撃沈する事であり、その手段は自分が座乗している航空機を激突させることである。その結果として、死は予測されるが、目的ではない。」ということであった。

男性文化がマッチョで固まっていた1950年代の事、それに護られて軍国主義時代の教育の尻尾が完全に切り離されていなかった私にとってその裁断は「詭弁」そのものに聞こえた。

しかしキリスト教を土台とする倫理学で「自殺」に非ずと裁断されてほっとしたのも事実であった。御国のために命を捧げた特攻兵士等が地獄に落ちるなど到底がえんじることなど出来ない相談であったから、私は救われた想いであった。

(P.4へ続く)

2018年 第2回 国際理解講演会 音とホール音響のお話

講師 中島章博氏 指揮者・作曲家
東京大学大学院工学系研究科建築学専攻・建築音響工学博士

日時：2018年10月30日（火）

会場：港区立生涯学習センター 305号室

講師の中島様には前回、2016年7月に、ご自身の留学生活（オーストラリア国立ザルツブルク・モーツァルテウム大学指揮科）の体験エピソードを講演いただき、たいへん好評でした。今回はもう一つの専門分野から「音」・「響き」・「ホール音響」について、お話をうかがいました。



○音に関する基礎的なお話

はじめに、「音」についてそれぞれの立場の違いから説明されました：

- ・音楽屋としては、人間が聞いて感情の変化をもたらすもので、知れば知るほど奥深く、そして楽しく悩むものである。
- ・工学屋としては、音波すなわち波動。空気中であれば空気の粒子が振動することにより生じる疎密波にて伝搬するものである。

波には、横波と縦波がある。水面をイメージしてみると、水は上下に動き、波は横へと広がる。これが横波。いっぽう音は、空気の震えが伝わる「疎密波」で、これは縦波の一種。何かの震えにより、空気がつまったところとまばらなところができる。押し縮められた空気は、もどるときに先の空気を押し縮める。その空気の動きによって伝わったものを私たちは「音」として感じる。バネを使って伝わり方を示された。

○音色とは？

音の三要素

- ・大きさ(音量)：音の大きさの違いはピアノでいうと鍵盤を強くたたく(大きい)。弱くたたく(小さい)。これは空気の震えの強さ。デシベルという単位で表す。
- ・高さ(ピッチ)：ピアノの鍵盤でいえば、右にいくほど高い音が、左にいくほど低い音がでる。これは空気が時間あたりに振動する回数で決まる。周波数が高い(1秒間の波の回数が多い)ほど高い音になる。人は20ヘルツ～20000ヘルツまで聞こえると言われるが、大人の耳にはすでに20000ヘルツまでは聞こえず、どんどん衰えていく。
- ・音色(おんしょく)：同じ「ラ」の音を弾いてもフルートとヴァイオリンでは聞こえる音がまったく違う。これは、基本となる音のほかに高さの違うたくさんの音が色々な大きさと組み合わせられてできているからである。この組み合わせの違いでうまれる音の違いを音色という。波形も違ってくる。音色(ねいろ)という意味では、音の立ち上がり、のびしかた、減衰の仕方、切り方、人間の印象として、音量によっても変わる。

○和音とは？

異なる高さの複数の音を同時に響かせることを和音という。その時の音が調和して響くか、そうでないかによって協和音、不協和音となる。基本となる音の高さの周波数に対して2倍(オクターブ)、3倍、4倍と数が小さい整数比の周波数の音を重ねると響きがきれいに聞こえる。ビンを吹いて、3種類の音を出したり、フルートの管の一部を閉じて吹かれるなどの実演があった。

○響きとは？

1. 音が広がりつたわること。またその音。
2. ものに反射して聞こえる音や声。反響。
3. 余韻。

残響。また、耳に受ける音や声の感じ。クラシックの楽器は、「響き」がつくことを前提として設計され、その楽器の音と、その場の「響き」が合わさって音楽となる。それを生み出す場がコンサートホール・劇場である。楽器の音と会場のすべての反射音の重ね合わせ（残響）が人間の感覚にうったえかけてくる。

○ホール音響のお話

時代によって変わっていった音楽ホールの音響について、映像を使って話された。古代ローマの野外劇場は屋根がないが、音響はよかったといわれている。オーケストラの語はギリシャ語のオルケストラに由来している。野外劇場に見られる舞台と観客席の間の半円形のスペースを指しており、そこで合唱隊（コロス、コーラスの語源）が歌や台詞を発していた。

1700年以降だんだんと音楽は、宮廷で奏でるなどの貴族の為のものから、民衆の楽しみへと広がっていった。ミラノをはじめとする馬蹄形の劇場では、舞台のすぐ横の席は貴族の貴賓席になっていて観客席から貴族の姿が見えやすい設計になっているものが多い。

1781年にオープンしたライプチヒのゲヴァント（衣服の意）ハウスでは、もともと織物の倉庫や取引所であったものを、そのままホールとして使った。このように初期のホールは、音響の良さよりも、まずは人がたくさん入る場所を見つけて使用したりしていた。その後、ゲヴァントハウスは1884年に建てかえられ、当初500席だったものが1500席程の響きのよいホールになった。現在は再建され1920席のホールである。

ホールの形について、下記の例をあげて説明された：

- ・楕円形：ロイヤルアルバートホールやニュージーランドのクリストチャーチャーチ・タウンホール。
- ・扇形：ミュンヘンのフィルハーモニーホール。
- ・靴箱形（長方形に近い）：アムステルダム・コンセルトヘボウ、ボストンのシンフォニーホール、横浜のみなとみらいホール。少し膨らませてピア樽のような断面を持つのが大阪のザ・シンフォニーホール。
- ・円形に近い形：ケルンのフィルハーモニーホール。
- ・ヴィニヤード（ワイン畑）のような形：ベルリンのフィルハーモニーホールや東京のサントリーホール。

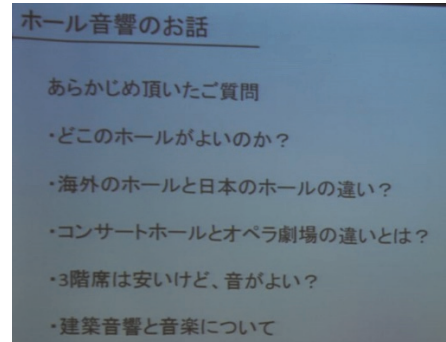
○ホール内の音響拡散デザイン

音響をよくするためにいろいろな工夫がなされていて、壁面の彫刻や、ウィーンのムジークフェラインスザールのように彫刻がほどこされている支柱なども音を拡散させる効果に結びついている。壁には屏風折れ、柱列をつけたもの、天井に円盤をつけて音を拡散させているところもあり、テストを重ねながら設計がなされていく。コンサートホールの音は、まず演奏された音が直接客席に最初にとどく「直接音」、これに続いてホール内で様々に反射されて客席にとどく「反射音たち」、これらの集まりで響きが作られる。この、ブレンドされた音が好ましく聴こえるのがよいホールということになる。

ホールでの演奏が想定されたどのクラシック曲も、響きを考慮して作られている。その例として分かりやすい、ベートーヴェンの「コリオラン序曲」の冒頭部分を用い、ソフトウェアで再構築し、響きの違いをデモンストレーションされた。

- ・響きのない室での演奏：・・・音がとぎれた感じ
- ・Roomでの演奏：・・・音響が少ない
- ・大ホールでの演奏：・・・コンサートホールで聴く響き
- ・カテドラルでの演奏：・・・神々しさはあるが、響きすぎて、テンポを速めると音がかぶってしまう

響きとは目に見えないが、心に響くもの。心地よいと感じるものがある響きである。



<質問に答えて>

Q：コンサートホールとオペラ劇場の違いは？

A：オペラ劇場では多少響きを少なく設計する。例えば人の話し声などは残響がありすぎると、何を言っているのかわからなくなる。欧州では使用目的が明確に特定されている。日本では「〇〇市民ホール」といった多目的ホールが多く建てられているが、言葉には響きすぎ、クラシック音楽には響きが足りないものが多く、これは言い換えると無目的ホールである、と中島様が習った先生がおっしゃっていたそう。

Q：日本ではどのホールがよいのか？

A：例として、上野の東京文化会館、サントリーホールをあげられた。上野文化会館の響きは音色のうそをつかない、サントリーホールはどんな音でも綺麗に聴こえるなどの評価も付け加えられたが、結局は聴く人の好みによるもの。

以上のとおり、前半は理論的なお話で、中島様も知識の程度の違う参加者への説明に配慮されていたようでした。最後に、良い響きとを感じるのは、科学では解けないそれぞれの感性によるものと述べられたのが心に残りました。

これに関連して、私が見たTVの話で恐縮ですが、2019年1月3日の深夜の番組、「辻井伸行×アイスランド」について。これは2018年4月のアイスランド交響楽団、指揮ウラディーミル・アシュケナージと辻井伸行のコンサート共演の収録でした。会場はハルパ・コンサートホール。この番組の中で、ホールの改修中に団員が練習していたという体育館で、辻井氏がピアノを弾き、アシュケナージ氏が体育館の中央に立ち、響きを確かめるという場面がありました。辻井氏は「ここでの響きはよくありませんね」と述べ、アシュケナージ氏は「劇場の響きは、演奏者の気持ちをも高めるもの」という内容の話をしていました。その後のハルパ・コンサートホールでの演奏（響き）は素晴らしいものだったようで、観客は総立ちで拍手をおくっていました。中島氏のお話を聞いた後だったので、番組の二人の言葉がよく理解できました。

（国際学術文化委員会担当 常任理事 磯部豊子）

（P.1 から続く）特攻兵士の死とノーベル賞作家川端康成

それから幾星霜、「特攻死は自殺であったか否か」という命題も遠い昔の事になっていた。それが最近忽然と、意識にのぼった。

あの日本のノーベル賞作家として第一号であった川端康成が、私が英語では嘲笑的に使われる「詭弁」の代名詞のような「ジェズイティカル」と呼んで憚らない知識人もいるだろうと予想される論理で、特攻兵士の死に言及しているのを発見したのである。それは敗戦の翌年1946年の7月『婦人文庫』に「生命の樹」と題して発表された小説においてであった。そこには九州の特攻基地で働いていた若い女性の主人公の言葉として、こう記されている。

強い死、作られた死、演じられた死ではあったろうが、ほんとうは、あれは死というものではなかったようにも思う。ただ、行為の結果が死となるのであった。行為が同時に死なのであった。しかし、死は目的ではなかった。自殺とはちがっていた。（『戦後占領期短編小説コレクション（1）1945-46年』、藤原書店、2007年、96頁。）

私が1954年頃に、アメリカの大学で、倫理学の特殊問題として、イエズス会士の神父で教授のヒュウ先生から学んだ「特攻死は自殺に非ず」の論理構成は日本国敗戦の翌年発表された作家川端康成の論理と全く同じなのであった。後にノーベル文学賞を受ける川端は敗戦翌年の此の時46歳であった。

（2019・2・9）

世界の味文化紹介 コロンビアの家庭料理

日時：2018年11月24日（土）

場所：港区立男女平等参画センター「リーブラ」

今回はコロンビアの首都ボゴダご出身で、ご自宅で料理教室を開いておられる降旗カミーラさんに講師をお願いしました。カミーラさんは31年前に降旗宏之氏と結婚して来日され。その後、ご主人の転勤に伴いブラジルで5年、メキシコで1年3か月住んだ経験をおもちです。日本で継続的に暮らす中で、コロンビア料理を日本の方々に知ってもらおうと思い、自宅で料理教室を開いたとのこと。

当日は下記4種類のメニューに取り組みました：

①アビアッコ（鶏とジャガイモのスープ）

塩とニンニクで味付けした鶏とジャガイモのスープ コリアンダーや長ネギを加え生クリームアボガド添えていただきます。

②トウモロコシのアレッパ・グアッカモーレ添え

トウモロコシに小麦粉と卵をまぜてお焼をつくり、グアッカモーレ（長ネギ・コリアンダー・唐辛子にアボガドをまぜたもの）を添えます。

③セビーチェ・デ・ランゴスティーノ

エビのセビーチェ（湯がいたエビ）にマンゴ、玉葱、コリアンダーのみじん切り、さらにオレンジジュースと酢を加えたものを冷蔵庫で冷やしてからいただく。

④焼バナナ

バナナにシナモンと砂糖をかけ、バターで焼き、さらに生クリームとチーズをかけてオーブンで焼いたもの。 温かいうちにいただきます。そしてアーモンドとコリアンダーご飯も添えられました。

料理実習に入る前に降旗宏之さんからコロンビアについて、画像入りの説明がありました。南米大陸の北パナマ運河の南にあり、その首都ボゴダは標高 2600 メートルの位置にあります。日本からはなんと14,400 キロも離れており、国土面積は1,139,000 km²（日本の約3倍）、人口は4,865万人（このうち混血75%、ヨーロッパ系20%、アフリカ系1%、先住民1%）とのこと。日本ではコーヒーが有名ですが、コーヒー農園には常にバナナの樹が植えてあります。バナナとコーヒーの産地が同じわけです。バナナの葉っぱでお弁当をくるんだりするそうです。

そしてコロンビアの代表的なお料理は上記メニューにもあるアビアッコ、牛肉・豚肉、野菜たっぷりのPUCHERO、カリブ料理POSTA CARTAGENERA などですが、その他の郷土料理も紹介して頂きました。その後、参加者一同にぎやかに料理実習に挑戦しました。そして降旗夫妻の国境を越えたストーリーもいっそう料理に味を加えました。



（常任理事 松崎加寿子）

第二回 日本語スピーチコンテスト

日時 2018年12月1日(土) 13:30~16:00

会場 港区立生涯学習センター101号室

今回は12名のスピーカーを含め、76名のかたが参加されました。全体の進行は下記の式次第にそって執り行われました。

1. 開会宣言・司会 (副会長 宮下ゆかり)
2. ご挨拶 (港ユネスコ協会会長 永野博)
3. スピーカー紹介
4. スピーチ開始
5. 休憩
6. 審査 (この間、会場にて参加者とスピーカーの交流会を設営)
7. 審査結果の報告
8. 表彰式
9. 参加者の感想
10. 交流会の総括
11. 閉会の辞 (副会長 菊地賢介)
12. スピーカーの記念撮影



永野 MUA 会長

第1部 スピーチ

下記12名のスピーカーが順番に自己紹介をした後、それぞれのテーマについてスピーチを行いました。

1. Ms. カレン・リー (オーストラリア 台湾) 聖インターナショナルスクール
「日本・台湾オーストラリア」
2. Mr. ジェイク・チョン (韓国・アメリカ) インターナショナルスクール7年生
「日本でおもしろいと思ったこと3つ」
3. Ms. パク・ジュンヨン (韓国) 弁護士
「私と東京、東大、新橋」
4. Ms. リュウ・フン (中国) 作新学院大学人間文化学部3年生
「出会いは宝、仲間は財産。仲間たちとの日々のこと」
5. Mr. クリフ・ユーン (オーストラリア) ニシマチインターナショナルスクール2年生
「さいこうのにはん ドラえもん!」
6. Ms. クロエ・ユーン (オーストラリア) ニシマチインターナショナルスクール5年生
「日本で感激したこと、おもしろいこと」
7. Ms. アンジャナ・K. C (ネパール) 非営利団体代表
「障害者外国人のわたしから見た日本」
8. Mr. バシル・アハマド・ハムダルド (アフガニスタン) アフガニスタン大使館一等書記官
「私の日本での忘れがたい思い出」
9. Ms. サントス・マリア・ルーデス (フィリピン) エスティシャン
「日本人は自分たちの為にももっと自己主張しませんか」
10. Mr. イエ・メーン・アウン (ミャンマー) 国際日本語学院学生
「元気が出るラーメンと自分で考えさせる日本語」
11. Ms. スロア・グリゾル (タジキスタン) 武蔵野大学 (タジキスタン国立言語大学からの留学生)
「親切さとは」
12. Mr. リー・チャー・チェン (カンボジア) 武蔵野大学 (プノンペン王立大学からの交換留学生)
「3つの興味」

第2部 会場参加者とスピーカーとの交流会/審査及び審査結果の発表

☆会場参加者とスピーカーの交流会

小林 亮 玉川大学教授ご指導の下に、慶応義塾大学ユネスコクラブ（港ユネスコ協会ユース委員会）の学生がファシリテーターとして参加しました。参加者は3つのグループにわかれ、それぞれスピーカーを囲みながら「留学生の苦労話、日本や日本語への思い、日本観や今後の展開など」について自由な質疑応答を行いました。



小林教授



スピーカーとの交流風景

（この間、審査委員は別室にて審査を行いました）

☆審査結果の発表

坪谷 郁子審査委員長（東京インターナショナルスクール理事長）より、以下の通り受賞者3名の発表が行われました：

「最優秀賞」：Mr. イエ・メーン・アウン（ミャンマー）日本滞在期間7ヶ月（右下写真の中央）

「港ユネスコ協会会長賞」：Ms. サントス・マリア・ルーデス（フィリピン）滞在期間8年（同右）

「審査委員特別賞」：Mr. クリフ・ユーン（オーストラリア）滞在期間14ヶ月（同左）



坪谷委員長



受賞した3名のスピーカー

☆表彰式

永野会長から上記3名の受賞者に対して、それぞれ賞状、カップ、記念品（輪島塗の夫婦箸）が、また優秀賞の方々に対しては、賞状、盾、記念品（輪島塗の夫婦箸）が授与されました。



表彰を受けた12名のスピーカー

☆受付担当

(慶應義塾大学ユネスコクラブ・港ユネスコ協会ユース委員会)

☆感想文 筒井 真子

(港ユネスコ協会ユース委員会委員長・慶應義塾大学ユネスコクラブ 6 期代表)

第 2 回スピーチコンテストで様々な国、年齢のかたがお話しされているのを聞かせていただき、私が日本で暮らしている限り感じるこのできないことを外国人目線で語っていただき、改めて日本のいいところを再発見することができました。また、交流会ではファシリテーターをつとめさせていただき、様々な国の方と交流する機会をいただき、とても楽しい時間を過ごすことができました。各国のお祭りの話や、民族衣装の話、国民性の話と、普段聞くこのできない話を直接聞くこともできました。私たちが思っている以上に、日本は素晴らしい国だと感じることもできたので、この日本で生まれ育ったことに感謝していきたいです。



受付デスクの慶大生

(副会長 平方一代)

(P. 11 から続く)「芝浦の歴史と麻布十番運河巡り」

☆ 開催にあたり：永野博 (港ユネスコ協会会長)

港ユネスコ協会ユース委員会主催、東京海洋大学水圏環境教育学研究室共催、慶應義塾ユネスコクラブ協力、それに実際の運河巡りには港区のユネスコスクールである三田高校と六本木高校からの参加者もあったこの企画、港ユネスコ協会の活動の変革点になりそうです。筒井慶應義塾ユネスコクラブ代表の開会挨拶にも力が入っていました。若い人々と活動の新しい歴史を作り始めましょう。



☆チラシ作成にあたって：山田夏鈴 (港ユネスコ協会ユース委員・慶應大学ユネスコクラブ) 色合い・目につくように・かわいらしいように・わかりやすく・地図を見やすくなどを注意して作成しました。

☆感想文

筒井 真子 (ユース委員会委員長・慶應大学ユネスコクラブ 6 期代表)

ユース委員会として初めて行わせていただいたイベントで、初めは、集客は大丈夫なのだろうか、盛り上がるイベントを作ることができるのだろうか、と心配ばかりでしたが、想像以上の子供たちの楽しそうな姿に安心しました。生憎の天候で、船に乗ってクルーズしている時は雨や寒さで大変でしたが、港区の景色の綺麗さに癒されながら無事目的地へたどり着くことができました。東京海洋大学の佐々木先生や生徒さんのお話も大変興味深く、大人も子供も食い入るように聞き入っており、クイズや実験への参加意欲も高く、素晴らしいなと思いました。ヘドロを使って電池を作る実験では、先生に教えてもらいながら実際に自分で電池を作っている子供達の姿は楽しそうで印象的でした。港区のことについて知らないことがたくさんあり、クイズを交えてのお話で知識を増やす良い機会でした。麻布十番で、湧水が出ている公園をみたり、実際に湧水を使用しているコーヒーを飲んだり、普段できない経験をたくさんすることができたと思います。今後も、ユース委員会としてこのようなイベントを企画し、若い層へ向けてユネスコ活動を普及させていければと思います。

☆ひとこと：峰尾茂克 (港ユネスコ協会理事・ユース委員会顧問)

久しぶりにユース委員会のイベントに参加させていただきとても有意義でした。

(副会長 平方一代)

書道体験教室

日時：2018 年 12 月 8 日（土）13:30～16:00

会場：港区立生涯学習センター304 号室

今回も金田萃夢先生（毎日書道展会員）を講師にお迎えして、総計 31 名の参加者（外国籍 8 名、スタッフ 4 名を含む）に日本の伝統文化の伝授をお願いしました。

実施内容

- ①書道具の説明
- ②手本を見ながら、漢字・ひらがなの練習
- ③色紙に清書する

参加者アンケートへの感想

- ・先生のご指導で素敵な字を書くことが出来ました。
- ・どんどん上手くなっていくのが、実感できた。
- ・難しかったけど、またチャレンジしたいと思います。
- ・小学校以来、40 年ぶりでした。緊張感が非日常的でとても良かった。
- ・静かに書に親しむことができ、大満足です。
- ・一回では物足りない。

主催者側からひとこと

参加者の皆さまに、書道の良さを満喫していただきました。ひとえに、金田先生の素晴らしいご指導の賜物と感謝しております。



（副会長 平方一代）

「芝浦の歴史と麻布十番運河巡り」

港ユネスコ協会ユース委員会担当イベント

日時：2018年12月16日（日）10時30分～16時00分

会場：東京海洋大学白鷹館講義室～運河巡り他

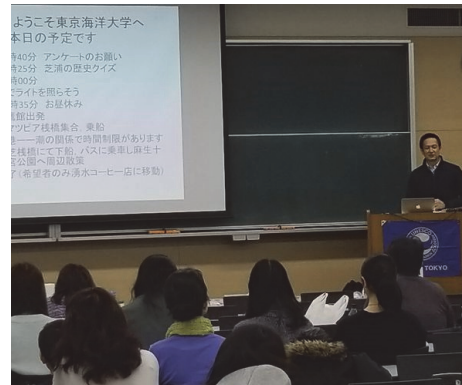
今回初めて企画されたこのイベントには、東京海洋大学・慶應義塾大学・六本木高校・三田高校・立教女学院・港区小学校4校などから合計47名のかたが参加されました。

実施内容：

1. 開会挨拶・司会（ユース委員会委員長・慶應義塾大学ユネスコクラブ6期代表 筒井真子）
2. ご挨拶（港ユネスコ協会 永野博会長）
3. 下記を含む講義（講師：東京海洋大学 佐々木剛教授）
 - ①芝浦にすむ魚、生き物についての説明とクイズ
 - ②ヘドロを使って電池を作る実験（昼食休暇）
4. ヤマツピア桟橋から船に乗船（芝浦、浜離宮の水路を船で巡る）
 - ①船上で投網の実演（佐々木教授）
 - ②竹芝ウォーターフロント開発計画についての案内（東日本旅客鉄道株式会社）
5. 有栖川宮記念公園にて池の見学と散策
6. 湧き水を使用したコーヒー試飲



筒井委員長



佐々木教授の講義



子供達の実験風景



運河巡りを楽しむ参加者の皆さん

「芝浦の歴史と麻布十番運河巡り」を開催して

東京海洋大学 佐々木剛

港ユネスコ協会会員の皆様、はじめまして。東京海洋大学の佐々木剛と申します。この度「芝浦の歴史と麻布十番運河巡り」を開催させて頂きました。多くの皆様のご参加のもと大盛況にて、芝浦運河の歴史の学習会と運河クルーズを終えることができました。これもひとえに港ユネスコ協会をはじめとする関係の皆様のおかげでございます。ここに、御礼申し上げます。

平成 29 年 12 月、イタリアのヴェネツィアにあるユネスコの政府間海洋科学委員会で、国連が目指す SDG s の達成に向けて会議が持たれました。その会議の中で、SDG s を推進する先行事例として私たちの取り組む東京海洋大学水圏環境教育プログラムが取り上げました。SDG s は、ESD の取り組みとも不可分であると言われておりますが、本学の水圏環境教育プログラムは、「森・川・海とそのつながり」を基調とした ESD の活動を、私のふるさとである岩手県宮古市にて地元のさんりく ESD 閉伊川大学等とともに実施してきました。



日本人は古来、森を大切にしてきました。森は、命を育みそして清冽な水を人々に提供します。さらにその水は海へと流れ豊かな漁場を形成し、大切な魚資源を涵養します。このような森川海とそのつながりが、日本の持続的な生活スタイルを支えそして、食文化を発展させました。この森川海とそのつながりを理解し大切にすることは、1 万年以上続けてきた持続可能なライフスタイルとはどのようなものなのかを再認識し、SDG s の目標達成につなげることができるのです。

ヴェネツィアから帰国後、港ユネスコ協会事務局様にご連絡させて頂きましたところ、面会して頂けるとのご連絡を頂き、感無量でした。そして、平成 30 年 3 月 20 日、港ユネスコ協会事務局様を訪問させて頂くことになりました。「森川海とそのつながりは日本人が代々受け継いできた精神性です。私に取り組んでいる岩手県宮古市では森川海とそのつながりがありますが、実は、港区にも数々の森川海とそのつながりと共に生きた形が残っています。縄文時代から海を活用した生活が営まれ、そして古川の河口では、漁師さんが今でも漁を行っています。麻布十番の横を流れる古川は、上流域で渋谷川となり、明治神宮や新宿御苑に端を発しています。」と皆様にご説明申し上げました。永野会長、平方副会長はじめ事務局の皆様から「陸を大事にすることは海を大事にすること、そして海を大事にするには陸を大事にする必要があることを多くの方々に理解して頂くことは、港区として大変重要ですね。」と賛同のお言葉を頂きました。また、永野会長には、文部科学省のユネスコ国内委員会にもお話を通して頂きました。

この突然の事務局訪問が、運河クルーズの発端となりました。さらに、ユネスコユース委員会にもご協力頂きました。慶應大学のユネスコクラブさんにはすてきなポスターの作成や司会を担当して頂き、また三田高校のユネスコクラブさんにも参加ご協力頂きました。この場をお借りしまして御礼申し上げます。また、本学習会、運河クルーズは、本学学生の水圏環境教育学実習の一環でもありました。本学の学生達は、5 月に自転車を使って、古川の河口から上流の明治神宮を訪れました。明治神宮では、人口林とは思えない鬱蒼とした林の奥から、湧き水が湧き出しています。さらに、日本で初めてサケの西洋式の人口ふ化が実施された新宿御苑を訪れ、観察会を行いました。10 月には、東京海洋大学のある品川から古川橋までシーカヤックによる環境調査を実施しました。そして、12 月には本会での成果発表会となりました。水域の現状を正確に把握し多くの人々に発信することは、環境を維持する上で非常に大切です。ぜひ、ユネスコプログラムとして発展できれば、と願っております。

ご承知の通り、ユネスコは教育、科学、文化の推進を通して、世界の平和と福祉の向上を目指す国際機関です。芝浦の歴史を知り、運河をクルーズ船にて巡ることで、先人が伝えてくれた森川海とそのつながりの重要性に触れることができます。これからも「森・川・海とそのつながり」を学ぶ港ユネスコプログラムとして継続し、SDG s の世界の手本として持続可能な社会の発展に寄与することを心から願っております。

(P.8 へ続く)

海外を笑わせた落語

講師：鹿鳴家英楽（かなりや・えいらく）氏

日時：2019 年 1 月 22 日（火）18:30～20:30

会場：港区生涯学習センター 101 号室

講師紹介 永野会長 本日の講演会を担当している私共の国際学術文化委員会は国際理解をテーマにしているので、今回はその目的に相応しいと思う。鹿鳴家氏は日本にもユーモアがあるということを海外で紹介しておられるが、昨年の当協会の新年会で特別ゲストとして英語落語をして頂き大好評を博したので、もっと多くの方に聴いて頂きたいと思い、本日の講演会を開催した次第です。



講師プロフィール

英語落語家、神田外語大学・駒澤大学講師、キャナリー英語落語教室主宰。専門は英語教育だが落語や邦楽など日本文化に親しみ、国内外で落語や日本の歌を英語で公演。国内は小学校から大学、海外でも大学や JICA などの国際機関で公演している。1983 年に立川談志氏が落語立川流を創設した直後に立川流に参加。

講演内容の要約



まず、ウクレレを片手に牧伸二の漫談を日本語と英語で披露した。
「赤はストップ、青ならゴーで、黄色注意の信号灯は、年中変わるけど変わらないものは、うちの家計簿赤ばかり」→The red light means stop, and green light go, yellow light caution; that's a traffic signal. It changes all the time, but what doesn't change is a red of our housekeeping account.
「アメリカ、カナダは本腰入れてタバコと対決してる。日本の政府は出来ません。大株主だよ JT の」←英語にできる
「地震が多くておちおちできない。今後あるかと気象庁に聞いたら観測してるけど、とても自信はありません」←英語にできない。ダジャレは翻訳不可能。
東京の寄席では、落語会に俗曲や漫才、手品、こま廻しのような色物が入る。

19 世紀にできた都々逸も寄席でよく演じられる。以下、都々逸の例。

「立てば芍薬座れば牡丹 歩く姿は百合の花」←英語にできる

「噺家殺すに刃物は要らぬ 欠伸三つで即死する」←英語にできる

「信州信濃の新蕎麦よりも あたしゃあなたの傍がいい」←これもダジャレなので英訳できない。

「三千世界のカラスを殺し、主と朝寝がしてみたい」

これは遊女を歌った都々逸で、高杉晋作の歌と言われている。高杉は江戸末期の勤王家。三千世界の鳥は幕府方を指し、幕府方をみな殺して天皇に寄り添いたい、というのが本来の意味らしい。ちなみに、三千世界は仏教用語では全世界を表す。この歌を、ラフカディオ・ハーンが訳している。ハーンは、母方の国ギリシャで生まれ、アイルランドで教育を受けた後、アメリカで新聞記者になり、40 歳で来日して英語教師となった。その後、日本女性と結婚して小泉八雲となった。怪談斬で有名だが、都々逸も 70 ほど訳している。以下がこの歌のハーン訳で、元の日本語と比べると情報量が多くなっていることがわかる。
→This is my desire. To kill the crows of three thousand worlds, then to repose in peace with the owner of my heart.

海外での活動

昨年は 2 月にアメリカのアリゾナ州とカリフォルニア州、4 月末にラオスで公演した。アリゾナでは日本文化紹介のフェスタに参加し、ラオスでは国立ラオス大と JICA で公演した。今年は 3 月にカザフスタンのアスタナ市とジョージアのトリビシ市で公演予定。ジョージアはワイン発祥の国で、宗教はジョージア正教、カザフスタンはイスラム教で禁酒国なので、国によって噺をアレンジすることもある。

国内での英語落語会

定期公演は 3 月と 9 月にお江戸両国亭で行う。また、浅草のセブングーデン（外国人宿泊施設）では毎

月第三日曜日、4時から開催。「昭和元禄落語心中」が海外でも紹介されている影響で、外国人でも落語に興味を持つ人がいる。公演の詳しい日時は「キャナリー英語落語教室」のウェブサイトをご覧ください。

英語落語

英語落語に最初に取り組んだのは桂枝雀(1939~1999)で、1990年に枝雀の落語を生で聴いたことが、英語落語を始めるきっかけとなった。『枝雀のアクション英語講座』には、落語を英語にする際の言葉や文化の問題が興味深く語られている。言葉の問題としては、「夏の炎天下、お日さんがカーッと照りつける」に出てくるような擬態語の訳し方がとりあげられている。文化の問題としては、「愛宕山」に出てくる竹がとりあげられている。アメリカの竹はしならないので、その場面がアメリカでは通じなかったらしい。

「時蕎麦」では江戸時代の時間や通貨が出てくるが、現代と違うため、訳しきれない部分が出てくる。食事のときに音を立てるのは外国では御法度なので、そばをすする音についても、まくらで解説する必要がある。



日本語の笑い

日本語の笑いはダジャレが基本にある。日本人は子供の頃からその習慣が身についている。

「ここを台所にしようか?」「勝手にしろ!」

大人になると謎かけを楽しむ。

「新聞の朝刊とかけて坊主ととく」「その心は袈裟(今朝)着て(来て)、経(今日)読む」

英語の笑い

英語にもダジャレはあるが、内容で笑わせるものが多い。以下は新年のジョーク。

A : I have made two New Year 's resolutions. Starting January 1st, I will start a diet and stop eating sweets.

B : That's great.

A : Starting January 2nd, I will stop lying.

日本だと新年の抱負、というが、英語の **resolution** は「決意」なのでニュアンスが強い。殆ど守り通すことが出来ないのがジョークの対象となる。「1月1日に減量と甘いものを止める決意をして、2日目に嘘をつくのを止める」というもの。参加者全員で、いくつかの英語ジョークを楽しんだ。

落語と西洋文学

落語は日本や中国の民話や笑話に基づくものが多いが、実は西洋ネタもある。本日は西洋ネタを2席。



第1話：「動物園」

イギリスのショートストーリーが原作で、アルバイトを探していた男が動物園の虎になる。まず、鹿鳴家おそらさん(左写真：仕事は気象予報士)が日本語で演じて、その後、英楽師匠が英語落語で笑わせた。

第2話：「死神」

グリム童話の「死神の名付け親」が原作で、貧乏で子だくさんの男が死神に出会う。男は貧乏を逃れる術を死神から教わる。まず、鹿鳴家おそらさんがグリム童話を朗読し、その後、英楽師匠が英語落語で応じた。

今回は高台を設置して寄席らしい雰囲気でお客様を迎えた。ウクレレ漫談と落語で会場は盛り上がった。日本のユーモアの原点の一つである落語が最近、人気になっている。数多い海外公演で世界を笑わせて、文化交流に励まれている鹿鳴家英楽師匠の今後のご活躍を期待したい。

(副会長 奥村和子)

茶の湯体験教室

日時：2019年1月26日（土）13:30～16:00

会場：港区立生涯学習センター203号室

今回も松村 宗幸（裏千家 講師）先生を講師にお迎えして、総計32名の参加者（アメリカ・アルゼンチン・カナダ・タイ・トルコの外国籍を含む）に日本の伝統文化をご伝授頂きました。

実施内容

- ・茶の湯の歴史を説明
- ・お辞儀の仕方、歩き方、お菓子のとり方、薄茶の飲み方の説明と練習
- ・講師によるデモンストレーション
- ・各自、お点前の一部を体験する

参加者の感想

- ・時間がゆったりしてよかった。
- ・また機会があれば参加したい。
- ・新鮮な感覚でした。
- ・勉強になりました。
- ・楽しい会でした。
- ・なかなかない経験だったのでよかったと思います。

主催者側からひとこと

アルゼンチンの3歳女兒や8歳の男児の参加があり、楽しく和やかに過ごすことができました。季節限定「花びら餅」のお菓子をいただき、新年を迎えたことを実感いたしました。



（副会長 平方一代）

・・・能楽師・宮内美樹さんと謡「高砂」で新年を寿ぐ・・・

日時：2019 年 1 月 24 日（木）正午から
会場：NEC 三田ハウス 芝倶楽部 3F

今年の新年会は、ゲストに能楽師の宮内美樹さんをお招きして、「ユネスコの無形文化遺産」にも登録されている日本のすばらしい伝統文化を堪能する貴重な一日となりました。



<プロフィール>1971 年水戸徳川家に生まれる。東京大学を経て津田塾大学を首席卒業後、科学技術庁（現文部科学省）に奉職。32 歳の時に観た「能」に魅了され、その 3 か月後に退職し、修行に入る。8 年の住込み修行後、能楽師認定を受ける。以降、舞台での演能活動を中心に、伊勢神宮を始めとする神社・寺院、被災地での奉納舞台、普及活動、外国人（英語・仏語で）・子供への能楽教育に携わる。<https://www.shuuseikai.jp/>

なぜ、お祝いの席に「高砂」を謡っていたのでしょうか？「謡（うたい）」とは何？ユネスコ無形文化遺産に指定された「能楽（能・狂言）」とは？そんな疑問を解決してくれる「能楽の歴史」のお話から始まりした。

「能楽」には縄文時代頃からの日本人の美的感覚、体で感じてきた感性、太陽・月への崇拝、自然現象への恐怖、守ってくれている「自然」への信仰心等々の価値観が盛り込まれているといえるでしょう。このような自然信仰の基本精神を底流に、古代ギリシヤの仮面劇を起源として中近東・インドを経てきた大陸の文化・芸能が「遣唐使」によりもたらされ、それらが渾然一体となって「能楽（能・狂言）」の基礎が出来上がり、「日本の古典芸能」の礎となりました。その後、お寺や神社に舞台を設えての「奉納（信仰）」、そして「娯楽」となり庶民に親しまれてきました。

鎌倉時代を経て室町時代に、足利義満が「世阿弥」と出会い、世阿弥を認め、天皇家・公家に対する幕府の饗応芸能として重用。庶民の為の「信仰・芸能」に義満の意思を受け入れての手を加えて、今日の「能」という世界が形作られたのです。信長、秀吉、清正は、武士道精神が「能」に盛り込まれていることを見て、自ら演ずるほどに保護しました。家康迄もが「武家の式学（儀式に用いる音楽や舞踊）」として「能」を取り入れたほどでした。

自然信仰の精神に加えて仏教、神道、陰陽道、それに「武士道」の心である仁・義・礼・智・信 という道徳心がぎゅっと詰まっていることに人心をまとめるに最適な「道」として思われたからでしょう。明治維新以降の「能楽」は、世界に誇る「演劇」として再認識して財閥の力を借りて「保護」され昭和期迄進みますが、戦後の時代変化では能楽師自ら市民へ直接の「お稽古」へと発展し、今日となっています。

(P. 16 へ続く)



(P.15 から続く) MUA 新年会懇親会

さあ、本題の元旦の江戸城での恒例行事、将軍様に新年を寿ぐ能楽師の「高砂」の謡の再現の時間です。お祝いの席の名曲「高砂」の一節 ～ 四海波静かにて 國も治まる時つ風 枝を鳴らさぬ御代なれや ～ 全員でお稽古して、宮内さんの朗々とした「高砂」を拝聴。淑気たつひと時となりました。

＜まとめ＞ 日本文化のエッセンスの詰まった「能楽」のお話を興味深く聞ことができ最初の疑問が解けてきたと一同感動の声。分かりにくい、言葉が聞き取れないということで敬遠されがちですが、これを機会に、能楽堂で「能楽」を鑑賞したり、一歩進みたい方は、認知症になりにくい良い姿勢を保ち体幹に良いというお稽古事として「謡・仕舞」を始めたりは、いかがでしょうか？

(会員開発委員会担当 常任理事 小林 敬幸)

事務局便り

【ようこそ 新入会員】個人会員：石黒 恵理さん、鈴木 典子さん、田川 純子さん、塚田 忠康さん、横井 彩さん

【今後の事業予定】詳細は別途、チラシやホームページ等でお知らせします。

☆6月21日(金) 18:30～20:30 第一回国際理解講演会「縄文土器」

講師：国立東京博物館 学芸研究部調査研究課 考古学室長 品川 欣也氏

会場：港区立生涯学習センター305号室

【ご協力をお願い】

- ・日本ユネスコ協会連盟の東日本大震災子ども支援募金。常時受け付け中です（MUA事務局まで）。

〔編集後記〕

- ・英国内外のスポーツにおいて、日本選手の活躍（アイススケート・スキージャンプ・テニス等々）が連日届いております。特に女子が目覚ましい活躍には目を見張る思いがあります。そんな中、池江選手の衝撃的なニュースには、只々驚きを持って受け止めるしかありませんでした。一日も早く回復されんことをお祈りします。仮に東京オリンピックに間に合わなくても、その次のオリンピックで活躍する姿が目に見えます。ガンバレ!!! (井上順一)
- ・英国がEUからの離脱方策に苦慮し、米中が互いに関税を高め合っている最中、日本は、米国が離脱したTPP11協定によって、環太平洋11カ国と国際協調体制を組み、関税を撤廃し、自由化を進める動きを主導できたことは、評価に値する成果と考える。(前田幹博)
- ・インフルエンザが猛威を振るったこの冬。ご多分に漏れず、私もかかってしまいました。街中では予防のためにマスクをする人も多く、電車に乗ってもマスクが目立ちます。さて、これからは花粉の季節。まだまだマスクが手放せません。(小林真弓)
- ・去年は明治維新から150年ということで、関連書籍を何冊か買ったものの、例によって「積んどく」にしていた。このうち元勳のひとりに関する一冊をようやく読了したが、著者の的確な歴史解釈と臨場感溢れる記述により、視野が広がり今日の事象を診る目も養われた気持ちになった。(棚橋征一)

港ユネスコ協会事務局 (火～金 10:30～17:00)

〒105-0004 東京都港区新橋 3-16-3、 TEL 03(3434)2300、 TEL・FAX 03(3434)2233

Eメール：info@minatounesco.jp ウェブサイト：http://minato-unesco.jp
